

鎌田慧

ルポルタージュを生きる

鎌田慧



晶文社

著者について

鎌田慧（かまた・さとし）

一九三八年青森県に生まれる。早稲田大学文学部卒。現在、フリーのルポ・ライター。

著書―『死に絶えた風景』（ダイヤモンド社）『自動車絶望工場』（現代史出版会）『逃げる民』（日本評論社）ほか。

工場と記録こうじょうきろく

ルポルタージュを生きる

一九七七年一〇月二五月初版

著者鎌田慧

発行者中村勝哉

発行者株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―二二

電話東京二五五局四五〇一（代表）・一八四一（編集）

振替東京六〇六二七九九

堀内印刷・美行製本

ブックデザイン平野甲賀

©1977 Satoshi Kamata

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

（横印廃止）落丁・乱丁本はお取替えいたします

鎌田慧

ルポルタージュを生きる

鎌田慧



晶文社

工場と記録

ルポルタージュを生きる

鎌田慧



晶文社

I 運動と記録

ひとびととともに ルポを生きる

11

記録系の運命について 24

『自動車絶望工場』の周辺 44

なんのためにルポを書くか 54

闘いの記録と記録の闘い 67

運動と記録 84

「知識人」はどこへ 97

上野英信論 103

月を射つ 花田清輝追悼 114

II ルポルタージュを読む

森崎和江、川西到「与論島を出た民の歴史」

林えいだい「望郷——鉱毒は消えず」

田原総一郎「テレビディレクター」

松浦豊敏「争議屋心得」

F・ドップズ「ティムスターの反乱」

野川記枝「行旅死亡人」

全金本山闘争の記録編集委員会編「労働組合の死と再生」

小関智弘「粹な旋盤工」

鈴木均「整然たる破壊」

高田新太郎編著「安中鉱害」

丸山邦男「遊撃的マスコミ論」

戸村一作「小説・三里塚」

田原総一郎「原子力戦争」

三菱重工本社組合史編集委員会編「三菱重工本社組合史稿」

野添憲治、真壁仁「どぶろくと抵抗」

真尾悦子「土と女」

畑中康雄「労働者」

東京地評編「撃て！ 刑事弾圧」

中里喜昭「香焼島」

小林弘二「満州移民の村——信州泰阜村の昭和史」

Ⅲ 工場と記録

ベルトコンベア 今日の労働 165

本工・出稼ぎ・臨時工 182

三里塚 一九七七年五月一日^⑧ 191

出版社・編集者・文筆業者 197

鹿島コンビナート 往復書簡・関沢紀↕鎌田慧

216

囚人労働 矢島一夫・小野悦男・永山則夫 230

対馬 カドミウム鉱害隠し告発 242

白ろう病 246

コンピュータ 「一九八四年」の世界

250

福島潟 冷害と実力耕作

256

原子力発電

260

沖縄 あらたな始まりとしての

264

企業・暴力・労働

268

りんごと工場 黒井千次試論

279

あとがき

299

初出一覧

301

I

運動と記録

ひとびととともに

ルポを生きる

駅に降りたっても、べつにどこへ行くというあてもない。なにしろ初めてやってきた町だから、知りあいとて、ひとりもない。「さあーて」などつぶやいてはみたものの、なんにもいい知恵は浮ばないのである。下着を詰めこんだバッグを持ちなおして、キョロキョロ、あたりを見まわす。喫茶店の看板を見つけると、まずはホッとして、そそくさとはいる。モーニングサービスのトーストなどをかじりながら、ゆっくり新聞を読むポーズをとってはいるものの、内心はけっして穏やかなものではない。どこへ行こうか、必死で想いめぐらしているのである。わたしの「取材」は、たいがい、こうして始まる。というより、まだなかなか始まらないのである。

北九州小倉駅前の喫茶店に坐りながら、わたしはどこへ行くとか、思い悩んでいる。洞海湾の公害について一冊書く、これがこの駅に降りたった理由である。ある出版社にいる友人がその企画をたて、わ

たしを説得した。わたしの知識は、そこが、八幡製鉄所のある町であり、北九州工業地帯である、というだけである。その企画に魅力を感じたのは北九州工業地帯に行ってみたかったことと、八幡製鉄を、「やってみたい」というバクゼンとした気持からである。本を読んでもよく理解できないタチだから、事前に調べることがはしない。わたしの同業者たちは、おそらく汽車に乗るまでに、資料を集め、調べ、狙いを定めているにちがいない。それがあたり前のことである。効率的に仕事をするには、それは最低限の準備であろう。

たとえば、ジョン・ガンサーはこう書いている。

「旅行の第一の法則は、ある町に到着するなり時を移さず、脱出の手はずを整えておくことであつた」
あるいはこうも書いている。

「また思い出しても感心するのは、この本の執筆にかかる前に走り書きした内容のメモでは三十五章になる予定だったのに対し、できあがつた本ではわずか一章しか違わぬ三十六章となり、しかもその順序は変らなかつたことである。常に全体の構成をはっきり頭に入れておくこと、これが肝心だ」(『ガンサーの内幕』)

このような緻密さと用意周到さがなければ、彼の偉大な仕事はできなかったにちがいない。これにひきかえ、わたしの場合は、ある町に、ようやくたどりついたとしても、どこへ行くのか、なにをするのか、それさえ、まだ自分のなかではつきりしていない。ただ新日鉄をやってみたい、そんなアイマイモコたる状態である。が、それでも、やってみたい気持だけは、ただ強いのである。

北九州工業地帯イコール新日鉄八幡製鉄所。八幡製鉄所イコール鉄綱業。鉄綱業イコール基幹産業。林立する高炉。高炉の炉口からほとばしる溶銑。圧しつぶされながらロールの間を走り抜けるまっ赤な

鋼塊。長い間わたしの中で増幅されてきたそんなイメージ。そして八幡製鉄、日本の独占資本。そんな観念。それを書いてみたい。それだけをバネにして、まずはやってきたのである。だから、知識も、自信も、全体の構想などというものもない。それでも、北九州はやってきたかった町だった。八幡。労働者の街。そんな憧れもある。

わたしは、学校を卒業すると、鉄鋼の業界紙記者になった。三行広告を見て応募し、試験がやさしかったから採用された。鉄鋼業イコール基幹産業。そんな公式は学生の頃から自分の中にあったことも事実である。

しかし、喫茶店にいるばかりではどうにもならない。電話帳を繰って新聞社の番号を調べる。そこでスクラップを見せてもらい、取材の見当をつける。洞海湾の公害。まずそこから始める。取材源も資料もなんにもない時によく使われる方法である。A紙にするか、B紙にするか、C紙にするか、それは本人の好みの問題である。親切的な記者に会おうかどうか、それは「神サマのおぼし召し」というものである。

『ガンサーの内幕』には、こうも書かれている。

「私はジャーナリズムでまず第一に必要な要素は、『自分が知りたいと思っていることを知ること』であり、第二は、だれがその話をしてくれるかを発見することだと思う」

取材のアルファにして、オメガである。この一言に尽きる。取材とは自己発見の旅でもある。自分が知りたいことを取材の過程で発見する。それはすこしずつ対象に迫りながら、己れの問題意識を研ぎすまして行く過程でもある。「そして、それから」と前へ、前へと進む。自分に問いかけながら進む。自

分は何を知りたいのか、そして、結局何を書きたいのか。相手から学びながら、またこの原点に帰る。この往復運動の中から、すこしずつ見えてくる。そして、取材はまた、人との出会いの旅でもある。Aさんに会い、そこでBさんのことを聞く。Bさんに会って、Cさんのことを聞く、と、とめどもなく人に会わなければならない破目に陥る。ルポの面白さは、出会うまでの緊張と出会った時の感動の表現でもある。その運動の強さが、ルポの命の岐れ路でもある。このことをガンサーは一言で表現している。さすが、というほかない。

小倉駅に降りた理由は、洞海湾の公害について書くためである。だから、とにかく、その状態を知ることが必要になる。安宿に泊まりながら、たいしたアテもなく、洞海湾のまわりを歩く。取材する、というよりは、犬も歩けば棒にあたる、なにかいいことはないか、といったような気持である。わたしの場合、なんとなくその場に馴染まなければ、なにをやっているか思いつかないタチなのである。取材に出かけるたびに、自分のひっこみ思案な性格をイヤというほど思い知らされる。

若戸大橋のそばに、小さな船溜りがあって、十数艘の小舟が波にたゆたっている。洞海湾ではもう漁はできなくなったが、湾の外側の響灘ではまだ仕事ができる。そんな漁師が、網をつくろったり、船の手入れをしたりしている。そこへ行って、なんとなく話しかけるのである。たいがいのは、昔の話をするのは好きなものだ。まして、海を追われた漁師なら、よけい昔の海をなつかしむ。どうしてこの海が駄目になってしまったのか、網を繕う手を休めなくても、そんな話ならいくらでもしてくれる。そして、もっと昔のことは、誰に聞けばいいのかも教えてもらえる。誰が海を殺したか。それをいちばんよく知っているのは、漁師である。洞海湾の取材はまず、こうして始まることになった。

殺された海はいまどうなっているのか。それは船に乗ってみなければわからない。船に乗せてくれる

人を探すことになる。カネのないライターは、船を雇うことなどできない。また、雇ってみたところで、視えるものではない。そこでまず、海に出て仕事をしている人を探さなければならぬ。わたしの知りあつた漁師は、洞海湾内には出ない。魚がいなくてここに漁師は行く必要がないからである。彼に相談して、沖売りのMさんを紹介してもらうことになった。

工業港としての洞海湾では、さまざまな人たちがはたらいている。貨物船ではたらく船員、艇で生活する水上生活者、それらの船に日用品を売る沖売り。Mさんは碇泊している船に、魚を売って歩くのである。わたしは何度か彼の家へ行った。仕事の手伝いするから乗せて下さい、と頼んだ。彼は毎日、洞海湾を走り回っているの、海の汚染の状態には精通していたし、またそこでの生活者として、公害についての関心も深かったのだ。

また、この頃、福岡の九大でひらかれた「九大反公害闘争委員会」の集会に出席して、そこで、八幡製鉄の労働者で公害に取り組んでいる人と、沖仲士としてはたきながら労働運動をしている人とも知り合うことができた。

こうしてわたしは、洞海湾の公害から、洞海湾ではたらく人びとと八幡製鉄所の労働者の状態の取材へと進む機会を把むことになったのである。

人に会う、ということとは、教えてもらうことでもある。それはたんにどこに誰がいるか、とか、どこに何があるか、を教えてもらうばかりでなく、その場で生活している人たちからその人たちの生き方を実地に教えてもらうことでもある。だから取材は、自分に都合のいいことばかりを、あたかも奪い取るように訊きだすことではなく、ゆるやかな時間のなかで、ゆっくり話しあうことになる。